

オリンピックで目覚めた人権意識

山梨市立山梨北中学校三年 天野 莉沙

「すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。」今年の夏、私は初めて人権についてこんなにも考えた。

二〇二一年、コロナ禍で一年遅れのオリンピックが日本で開催された。無観客、マスク着用など、異例の大会となった。そしてまた、このオリンピックは、大会関係者の差別的発言による辞任や、アスリートによる人権侵害への抗議活動など、多くの人権に関わる問題を目にする機会ともなった。

このオリンピックで私が特に印象深かったのは、アスリートによる人権問題に対する発言だ。たとえば、サッカー選手が試合前に右膝をつくポーズを取り話題になった。これは人種差別への抗議活動に共感を示すポーズだという。また、体操の女子選手が、露出の多いこれまでのユニフォームではなく、足の先まで隠れるものに変更したことも話題になった。これはパフォーマンスよりも、女性という性が重視されていることに対するジェンダー差別を訴えたものだ。こうした、アスリート達の堂々と人権について抗議する姿が、とても格好良く見えた。そして、アスリート達からの発信により、普段日本の国際情勢のニュースではなかなか報じられることのない、人種差別や女性差別などの人権問題を身近に感じる事ができた。

一連の人権に関する事柄の中で気付かされたことがある。それは、日本人の人権意識の低さだ。私自身もこれまで、人権を侵害されているだとか、もしくは他人の人権を侵害しているかもしれないといった観点で考えたことはなく、特に人権を意識することはなかった。今回オリンピック関係者の辞任にあたり、国内の風潮も初めは、「謝罪をしたから」、「過去のことだから」と許容する方向に進んでいたように記憶する。日本では、「過去ことは水に流す」「がまん強く耐える」「女性はひかえめに」といったことが美德とされ、意見をすることが必ずしも好まれない文化があるように思う。しかし、世界は違った。間違っていると思う

ことには、毅然と立ち向かい正そうとする。オリンピックという世界が注目するイベントでは、日本の常識は通用せず、国際的な潮流に日本国内も人権問題に目覚めていったように感じた。これまで、疑問に思いながらも許容してきたことに声を上げ、正していくことが国際基準なのだと気づかされた。

いじめ問題においても、これまでの対応では、罪の意識が希薄なままになってしまう。もっと人権侵害という観点で考えていく必要があるのではないだろうか。いじめを受けた側は、一生消えることのない深い傷を負っているはずだ。加害側にも一生降ろすことのできない罪を背負ったことを自覚してもらいたい。いじめはそのくらい重い人権侵害なのだから。

人権について考える時、自分の中にある差別についても考えたい。これは以前の経験から自分の中にできてしまった思い込みなのだが、こんなことがあった。コンビニのレジに並んでいた時、前に並んでいた怡幅の良い中年男性が、レジの女性に対し横柄な態度をとったことだ。大きな声と乱暴な仕草から恐怖を感じた。それ以来、同じような見た目の男性に恐さを感じ、避けていた。しかし、これも見た目で他人を判断する差別なのではないかと自分の中の差別について常に問う必要があると感じた。

この夏、人権について考えてみて、人権教育は非常に大切なことだと思った。これまで自分の発言が差別にあたるとの認識がなかった人も、知ること、学ぶことによって変わっていくのではないかと期待する。たとえば、子どもに対する体罰について、数年前まで六割もの人が容認派だった。しかし、「体罰は子どもの権利を侵害する行為である」と社会啓発を行ったことにより、四割にまで減らすことができた。まだ四割もの大人が子どもへの体罰を容認していることは驚きだが、広く子どもの権利を伝えていくことにより、さらに減らしていくことが可能であると思う。このように、人権教育が行き渡ることで、他の差別や人権侵害においても意識を変えていくことができるのではないと思う。

オリンピックで高まった人権意識の火を絶やさずに、誰もが意見を言い合い、人間らしく幸せに生きていける社会になってほしい。私自身も勇気をもって声を上げていきたい。この国が、自分の人権も大切に

し、他人の人権も尊重し合える社会へと進んで行くことを願っている。